

令和 2 年 6 月 12 日現在

機関番号：13101

研究種目：若手研究(A)

研究期間：2016～2019

課題番号：16H05933

研究課題名(和文) バイアスから探る道徳的思考の不合理性と多元性

研究課題名(英文) Plurality and Irrationality in Biased Moral Thinking

研究代表者

太田 紘史(Ota, Koji)

新潟大学・人文社会科学系・准教授

研究者番号：80726802

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、道徳判断や道徳的意思決定を支える心理過程やそれに含まれるバイアスに関する経験的知見を踏まえ、人間の道徳的思考がどのような多元性や不合理性を含んでいるのかに関する記述的理解を図るとともに、そうした記述的理解がこれまでの倫理学上の諸問題に関してどのような規範的含意を持つのかについて照合的な検討を行った。またこの検討を通じて、道徳的責任・行為者性・道徳の客観性に関する倫理学上の論争をはじめとした理論的問題にとって、記述的理解が規範的含意を持つ理路を明確化した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、倫理学上の論争における経験的知見の方法論的役割の明確化や、道徳的責任や行為者性にまつわる論争の歴史的な再理解をもたらすものである。またその一部は、自由意志の概念/信念の認識的起源に関する洞察をもたらすものであり、この点は今後の研究でさらなる展開を図る予定である。

研究成果の概要(英文)：This study provides a descriptive understanding concerning pluralism and irrationality embedded in human moral thinking, via considering into account empirical findings about psychological processes underlying moral judgments and moral decision making, and biases within them. In addition, this study clarifies what normative implications such a descriptive understanding may have on some issues in ethical theories, such as debates concerning moral responsibility, human agency, and moral objectivity.

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：実験哲学 道徳心理学 道徳的責任 自由意志 メタ倫理学

1. 研究開始当初の背景

道徳の本性を論じる倫理学上の諸論争においては、人間が行使している道徳的諸概念をどのように一貫したものとして理解できるか、また道徳的思考がどのような合理性規範に従うのが問題となってきた。他方で最近の経験的知見は、様々な局面における道徳判断や道徳的意思決定が文脈依存的な処理やバイアスを抱えていることを明らかにしつつある。そこで本研究では、これら両者の問題と知見を照合しながら、むしろ多元性と不合理性を道徳的思考の重要な本性として認めることで、倫理学上の論争にどのようなインパクトがありうるかを検討する。

2. 研究の目的

本研究は、道徳判断や道徳的意思決定の心理メカニズムやそれに含まれるバイアスに関して、実験哲学、道徳心理学、社会心理学といった諸分野から明らかになっている経験的知見を踏まえ、人間の道徳的思考がどのような多元性や不合理性を含んでいるのかに関する記述的理解を目指す。加えて、そうした記述的理解がこれまでの倫理学上の諸問題に関してどのような規範的含意を持ちうるのかについて、照合的な検討を行うことを目指す。とりわけ、道徳的責任、行為者性、そして道徳の客観性をめぐる哲学的問題に焦点を合わせ、それら各々に関連する諸概念について検討を行い、同時にそれを通じて基礎的な倫理学理論における方法論の再理解と明確化を目指す。

3. 研究の方法

第一に道徳的責任をめぐる問題として、他行為可能性が責任の成立に必要なかどうかをめぐる問題を取りあげ、責任帰属の心理過程に関する経験的知見がそれにどのように関与しているかを検討する。第二に行為者性をめぐる問題として、自由意志による行為が決定論との関わりにおいて両立論的なものかどうかをめぐる問題を取りあげ、自由意志の概念/信念に関する経験的知見がそれにどのように関与しているかを検討する。第三に、道徳的な事実や性質が客観的な存在論的身分を持つかどうかをめぐる問題を取りあげ、道徳的不一致に際した反応に関する経験的知見がそれにどのように関与しているかを検討する。

4. 研究成果

(1) 道徳的責任と他行為可能性に関する検討

道徳的責任にとって他行為可能性が必要であるという原理を疑問に付す哲学的議論として、フランクファート型事例に訴えるものが存在する。また、最近の実験哲学や道徳心理学の研究では、フランクファート型事例における道徳的責任の帰属にまつわる直観が調査実験によって再現されるとともに、そこでの直観が行為知覚の操作によって一定のパターンで変動することが示されている。しかし、こうした経験的知見が、当該の哲学的議論をどれくらい強化したり、その議論への反論を退けたりするうえで有効なのかについては判然としてこなかった。

そこで本研究では、そうした経験的知見は、単にそうした個別事例に関する直観を再現することではなく、むしろその責任帰属を支える心理メカニズムを一般原理として明るみに出すという点に重要性があることを論じた。道徳的責任をめぐる哲学的議論の歴史的経過を振り返れば、そこには道徳的責任にとって他行為可能性が必要かどうかという論点と、そうした必要性は我々の道徳実践に組み込まれているかどうかという論点が含まれている。責任帰属の心理メカニズムを解明することはこの後者の論点に関して直接的な意義を持っているだけでなく、責任概念の改定をめぐる規範的議論と組み合わせることで前者の問題にも資することになる。本研究は以上のような仕方で、記述的知見が道徳的責任をめぐる哲学的問題に対して含意を持ちうる理路を明らかにした。

(2) 自由意志の概念/信念に関する検討

道徳的責任を基礎付ける行為者性の中核を占めるものとして、自由意志による行為が哲学的議論において重視されてきた。そこでの中心的係争点は、自由意志とそれが基礎付ける道徳的責任が、決定論的な人間理解と両立可能なものかどうかというものであり、そこで同時に問題になるのは、そもそも自由意志の本来的な概念化はどのようなものかという点である。これをめぐって最近の実験哲学における自由意志概念の研究や、社会心理学における自由意志信念の研究は、一方でそれが両立論的なものであると示唆しているが、他方でそれはむしろ非両立論的なものであると示唆する研究もある。そこでは、両立論的な概念能力がその運用上のバイアスを受けるといふ説明と、むしろ非両立論的な概念能力がその運用上のバイアスを受けるといふ説明が、対抗した状態にある。

本研究では、こうした先行研究における自由意志の概念/信念の一貫性の想定に反して、むしろそれがむしろ多元的で一貫したものではないという提案を行った。加えて自由意志の概念/信念に関する自由記述法に基づいた研究を行った結果、参加者が与える記述は両立論的傾向と非両立論的傾向の両方を潜在的に含むものであることが示された。さらに、自由意志の本性をめ

ぐる哲学的論争を、自由意志の概念／信念を一貫化させるような概念工学的試みとして歴史的観点から再理解しつつ、その試みの前提となる現行の自由意志の概念／信念についての記述を与えるものとして、一連の実験哲学や社会心理学の研究を位置付ける議論を新たに与え、両者の方法論的役割を明確化した。

また、こうした議論において参照されるのは、道徳的責任や自由意志を他者に対して帰属することに関わる知見であり、これは本研究にかぎらず多くの先行研究において同様であるが、他方で自由意志の概念／信念の認識的起源として、自己のうちに経験される自由意志の認識が重要な役割を担う可能性がある。そこで、こうした認識が意識的意志や自発的行動に関する科学研究においてどのように扱われてきたか、またそれが最近の実験哲学的手法を導入することによってどのように改善されうるかを検討した。この点は、今後の研究として集中的な展開を図る予定である。

(3) 道徳の客観性と相対性に関する検討

メタ倫理学における客観主義的な理論を支える一つの論拠として、人間一般が道徳に関して持つ諸概念が客観主義的なものだというものがあるが、こうした想定は近年の実験哲学や道徳心理学からの知見によって批判にさらされている。とりわけそこで注目には値するのは、道徳的不一致の場面において、人間が道徳の客観性にコミットするような反応を示すかどうかを調べる経験的研究の成果である。そうした経験的研究は道徳的諸概念の相対主義的性格を示唆するものとして受け止められる傾向にあるが、これに対して本研究は、人間が持つ道徳的諸概念は必ずしも一貫したものではなく、むしろ客観主義的性格と相対主義的性格が混在したものであるという見方によって整合的な説明を与えられることを提唱した。さらにこうした記述的知見はメタ倫理学における不整合説あるいは変動説を支持することを論じ、これを通じて、道徳的思考に関する経験的知見が倫理学的論争の勢力図に影響する事例として明確化した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 太田紘史 | 4. 巻 52(1) |
| 2. 論文標題 物理主義者であるとはどのようなことか：鈴木貴之『ぼくらが原子の集まりなら、なぜ痛みや悲しみを感じるのだろうか』を評して | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 科学哲学 | 6. 最初と最後の頁 143-162 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |
| 1. 著者名 Watanabe Takumi, Ota Koji, Karasawa Kaori | 4. 巻 17 |
| 2. 論文標題 How do Japanese conceptualize free will? | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 Journal of Human Environmental Studies | 6. 最初と最後の頁 79～84 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4189/shes.17.79 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |
| 1. 著者名 太田紘史 | 4. 巻 46 |
| 2. 論文標題 物理主義を論駁することの難しさについて | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 現代思想 | 6. 最初と最後の頁 267-277 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |
| 1. 著者名 太田紘史 | 4. 巻 45(21) |
| 2. 論文標題 意識をめぐる物理主義と反物理主義のバトルライン | 5. 発行年 2017年 |
| 3. 雑誌名 現代思想 | 6. 最初と最後の頁 133-153 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計13件（うち招待講演 5件 / うち国際学会 2件）

| |
|---|
| 1. 発表者名 Koji Ota |
| 2. 発表標題 Methodological Reflection on the Frankfurt-style Cases |
| 3. 学会等名 8th Nagoya Meta-Philosophy Workshop (招待講演) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Koji Ota |
| 2. 発表標題 Libet-style experiments and the phenomenology of free will |
| 3. 学会等名 One-day Seminar in Practical Ethics (上廣倫理財団日英交流プログラム) (招待講演) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 太田紘史 |
| 2. 発表標題 実験哲学への誤解反論に潜む誤解：フランクファート型事例の場合 |
| 3. 学会等名 応用哲学会第10回年次研究大会 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|-------------------------------------|
| 1. 発表者名 太田紘史 |
| 2. 発表標題 リベット型実験の再検討：経験される自由の観点から |
| 3. 学会等名 科学基礎論学会2018年度総会 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 太田紘史 |
| 2. 発表標題 心の概念工学にまつわる規範的問題 |
| 3. 学会等名 日本社会心理学会第59回大会 ワークショップ 「心」の概念工学 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Koji Ota |
| 2. 発表標題 The Complex Nature of the Concept of Free Will |
| 3. 学会等名 Hiroshima Philosophy Forum #1 Mind and Cognition (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 太田紘史 |
| 2. 発表標題 意識のハード・プロブレムは自然化できるか：論争史と新たな展望 |
| 3. 学会等名 北海道大学講演会 (招待講演) |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 太田紘史 |
| 2. 発表標題 実験哲学への誤解反論に潜む誤解：フランクファート型事例の場合 |
| 3. 学会等名 応用哲学会第10回年次研究大会 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Koji Ota |
| 2. 発表標題 The Philosophical Significance of Social Psychology: The Case of Free Will |
| 3. 学会等名 31st International Congress of Psychology (国際学会) |
| 4. 発表年 2016年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 太田紘史 |
| 2. 発表標題 自由意志論のメタ的検討：哲学的論争の心理学的本性を探る |
| 3. 学会等名 南山大学哲学セミナー：メタ哲学の諸問題(1) |
| 4. 発表年 2016年 |

| |
|-----------------------------------|
| 1. 発表者名 太田紘史 |
| 2. 発表標題 自由意志論を生み出す心理：記述的研究に向けて |
| 3. 学会等名 日本科学哲学会大49回大会 |
| 4. 発表年 2016年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 太田紘史 |
| 2. 発表標題 道徳判断のメカニズムから学ぶべきことは何だろうか |
| 3. 学会等名 Morality mod Scienceセミナー（招待講演） |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 太田 紘史 |
| 2. 発表標題 自由意志はどのように概念化されるべきか：心理学的な記述の規範的な含意 |
| 3. 学会等名 道徳・社会認知研究会 |
| 4. 発表年 2017年 |

〔図書〕 計4件

| | |
|--------------------|-----------------|
| 1. 著者名 蝶名林 亮 | 4. 発行年 2019年 |
| 2. 出版社 勁草書房 | 5. 総ページ数 368 |
| 3. 書名 メタ倫理学の最前線 | |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 戸田山 和久、唐沢 かおり、橋本 剛明、鈴木 貴之、渡辺 匠、太田 紘史、遠藤 由美、島村 修平 | 4. 発行年 2019年 |
| 2. 出版社 名古屋大学出版会 | 5. 総ページ数 296 |
| 3. 書名 概念工学 宣言！ | |

| | |
|---------------------|-----------------|
| 1. 著者名 信原 幸弘 | 4. 発行年 2017年 |
| 2. 出版社 新曜社 | 5. 総ページ数 320 |
| 3. 書名 ワードマップ心の哲学 | |

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 信原 幸弘、佐金 武、太田 紘史、中山 康雄、伊佐敷 隆弘、福田 敦史、米田 英嗣、高橋 泰城 | 4. 発行年 2017年 |
| 2. 出版社 春秋社 | 5. 総ページ数 288 |
| 3. 書名 時間・自己・物語 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|--|---------------------------|-----------------------|----|
|--|---------------------------|-----------------------|----|